

了元

2

親は仙た却、此の良い黒い眼は昔のやうに輝か
 しく明日かつた。しかし、細女の全体の感じ
 は昔のまゝではなかつた。物に肉感的な女に
 なつてゐた。豊かに肉つた身体は、しまつ
 ても有な初、と此のあていやに柔かく、しま
 リの有いやう有のりか感じられた。細女は萬
 年筆で何かしきりと書いてゐた。
 まか知つ有いやだ。——さう思ふと、細女
 の胸はあやしく鳴まのであつた。細は何んとな
 く幸福を感じた。

細女の母は彼の山に近かりて、仁丹の代金を
 台の上には置いた。

「有難うございます。」

「いくらですか。」

「三十錢でございます。」

彼は支拂ひを済ました。愈々言ひ出すのだ
 と思ふと、丁度先生にあてらるやうには
 わくわくした。彼は紅い沈黙を破つて言つた。
 「あや、吉田さんぢやありませんか。」
 千之と知つたなと、しつぱつた水である

佐々木千之